

あいだ、「心の花」校正の仕事で亡き住さんといっしょに仕事してくれていた。

うつつらと埃の積める標本箱にアミメカゲロウ目へ  
ビトンボ  
水口奈津子

学校の理科室にある標本箱らしい。「へビトンボ」は図鑑によると、羽を広げると十センチにもなる大型の昆虫で、あごが大きく、噛む力が強いので、「へび」の名前がつけられたという。下句を十四拍、すべてめずらしいトンボの名前につかって特色を出している。

イノシシの姿に似ると思ひつつ里芋洗ふ亀の子束子  
で  
辻尾修

里芋がイノシシに似ているという。童心にかえったような、シンプルでストレートな比喩に注目。一連の作によると、収穫期の里を通りがかったところ、顔見知りでもない人が里芋を分けてくれたとのこと。そんな体験にふさわしい比喩の素朴さ。

梅の咲く日まで花のない中庭の目にしじみと優し  
き緑  
森屋めぐみ

花の季節ではなく、花のまったくない季節の花の歌である。意味内容で見せるのではなく、レトリックで見せる女人向きの歌と言っているだろう。

両隣階下音なき昼下がりが集合住宅の巨き寂しさ  
河野洋子

無人の静寂ではない。多くの人がいるにもかかわらず物音も気配もない静寂である。大ホール満杯の人が黙祷する何十秒か、朝の授業がはじまったばかりの校舎の廊

下……。そんな場面が連想されるが、ここはマンション。「巨き寂しさ」で、うまくまとめている。

芋きたり葡萄もきたり秋の日はふるさとの山まぢか  
と立てり  
間宮清夫

故郷から、収穫されたばかりの芋や葡萄が送られてきた場面。おのずから、ふるさとの山が間近にイメージされる、というのである。私のように「ふるさと」がない者にはうらやましい限り。また、これも私のように、山がない関東平野に生まれ育った者には、へ山まぢかなりんのリアリティが読み切れないのが残念。

「もう終つた」晴れやかに恋を言ふひとの語尾の強  
さが耳に残りぬ  
足立晶子

作者の心に広がった小さな波紋。そのみなもとを点検するような一首。

心ならずも断念したのだろうか。だれかに対する過大な配慮があったのか。そんな「ひと」の心の中が、かなりの深さまで読めてしまったとまどいが読める。人生の物語を抱き込んだ歌として注目した。

年中が目借時なる十五歳「起さないで」と貼り紙を  
して  
古川典子

息子あるいは娘の部屋のドアに、「起さないで」と貼り紙がしてあるらしい。男の子はそんなことはないだろうから、娘さんかな、と思って読んだ。「目借時」に関しては「選者ルーム」の斎藤佐知子評を参照してほしい。